

## 『いい川』は『いい川づくり』

「川の日」ワークショップは、市民・行政・研究者の誰もが共感・共鳴できる「いい川」「いい川づくりの」の概念形成と、交流をかねて98年より毎年開催してきた。着実に果実を形成しつつあることは、毎回は発行している冊子『「川の日」ワークショップ』を見るだけでもよく解る。

私は、冊子の「おわりに」を担当している。読み返すと「川の日」ワークショップとともに、私の川への眼差しも変わってきているようである。何よりも、当初からの大きな課題であった、「いい川」と「いい川づくり」の関係について少し整理できたと思う。

一昨年第4回では、「いい川」と「いい川づくり」との重複化について触れている。昨年第5回では、「川はふるさと」の代名詞であり、「ふるさと」をキーワードにするとその重複化も当たり前になる、そのような趣旨を述べた。今年は皆さんの熱気のこもった議論を聞いていると、さらに新しいことに気づいた。

私だけでなく、大勢の人の観念に、本来の川は「自然」という思い込み、さらに言えば錯覚があったように思う。だからといてもよいであろうが、あまりに人工化した河川に対し、再自然化を図ることに、多くの人々が疑問に感じなかった。「人工対自然」、わかりやすい構図である。

私は、多自然工法や自然再生事業、生物多様性に問題があるといっているのではない。川という自然をもう少し掘り下げて考えて見る必要があるのではないか、ということである。

日本に天然の原始河川はほとんどない。山地の溪流河川も、一見、天然に見えるが、森林植栽や中下流の工作物や水質などの影響をほとんど受けている。山地河川は別としても、扇状地や平野を流れる中流、下流、用水路等は、ほとんど「人為的自然」である。開墾し人が住むために、造ってきた川である。洪水等があると、それが自然であることを思い知らせてくれる。しかし、河川が「人為的自然」であることには変わらない。山で言えば、杉や檜の人工林や里山といったものであろうか。

人為的自然は、初発に造るだけでなく、その土地の風土と日常生活の中で住人が、日々育み、手入れしてきたものである。その意味では、川は日々つくられているもの、といってもよいであろう。「いい川」と「いい川づくり」は表裏一体であり、同義といってもよい。

川の自然性が大方の合意を得た今日、次は誰がという主体の問題が大きな課題となろう。「川の日」ワークショップは、そのことを予感させる。

「川の日」ワークショップ実行委員長  
特定非営利活動法人 全国水環境交流会 代表理事  
森 清和